

平成 28 年度 第2回鶴見・あいねっと(鶴見区地域福祉保健計画)推進委員会 議事要旨

日時：平成 29 年 1 月 17 日（火）15：00～17:00

場所：鶴見区役所 6 階 9・10 号会議室

推進委員：小山委員長・八森副委員長

遠藤委員・大野委員・押山委員・河西委員・烏田委員・河合委員・齊藤委員
神保委員・田中(博)委員・増子委員

事務局：鶴見区

区長、福祉保健センター長、同センター担当部長、福祉保健課長
高齢・障害支援課長、学校連携・こども担当課長、生活支援課長、総務部長
地域力推進担当課長、地域力推進担当係長、区社会福祉協議会事務局長
区福祉保健課、区社会福祉協議会

- ・写真撮影の承認及び議事録のホームページへの掲載について確認

1 開会

2 鶴見区長挨拶

3 議事

(1) 平成 28 年度あいねっと推進フォーラムについて

- ・区社会福祉協議会事務局次長よりチラシ、フォーラム冊子（案）をもとに説明。
- ・3月4日（土）13：30～16：00 鶴見公会堂にて実施
- ・福祉功労者感謝会、事例発表3団体（にこにこ会、つるの恩返し・ランチさるびあ、warm place）、イベント（潮風によるエイサー演舞）を実施予定。

(進行役)

推進フォーラムでつるの恩返しが事例発表をされるとのことだが、どんな発表をされるのか。

(委員)

本日打ち合わせをして資料を作成している。どんな内容かは当日お楽しみにしてください。

(進行役)

推進フォーラムについて何かご意見があれば発言を。

⇒意見等なく、事務局案を承認。

(2) 地区のあいねっと活動について

- ・福祉保健課事業企画担当係長より平成 28 年度の推進における地区の活動状況をパワーポイントにて説明

- ・全体を通じて各地区懇談会やあいねっと推進組織にて課題解決にむけて議論をしている。
- ・各地域ケアプラザのお祭りや地区の運動会などでアンケートをとって地区の声をあつめるなど各地区であいねっとの周知、取組みを行っている。
- ・具体例として以下3事例を提示。

【豊岡地区】「障害のある方の災害時の支援を考える」

災害時の障害者の支援方法を地域住民が学ぶため、横浜市社協障害者支援センターが事務局のセーフティネットプロジェクトの出前講座を行った。発端は豊岡地区の連合会長より、豊岡地区は障害者作業所が多く、災害時の避難所運営でどう障害者を支援するか考えたい、また災害の切り口から地域として障害者の理解を深めたいという思いから実施された。障害をもつ当事者も発表し、当事者が住民の前で自らのことを話すことも第3期計画の目標である、意欲と能力を発揮する場や機会をつくるという面でもよい機会になった。

【潮田東部地区】「公園で健康づくり」

4つの公園で体操教室を定期的実施。地区として健康課題があり、行政の元気づくりステーションと絡めながら取組みを進めている。体操で使用するループは障害者作業所で購入している。保健活動推進員の会長より活動が明確になったという声もあった。地区のあいねっとフォーラムでも改善点を話し合っている。

【生麦第一地区】

第3期計画を迎えるにあたり、地区の目標を実現するために地域住民に対して盆踊り大会やケアプラザの祭りでアンケートを実施。「まちへのおもい」を記入してもらったり、シールアンケートを行うなど今後の活動の方向性に関わる情報を得た。アンケートでは、地域情報の入手先は掲示板というのが予想よりも多かった。アンケートには地域住民の声をいただき、丁寧に計画を実施していこうという町の意図が込められている。

(進行役)

実際にあいねっとの取組みが動き出しているなかで3つの事例をきいてもらいました。3つの事例にすべて言えることは「当事者の参加」なのだと感じました。

豊岡は障害者の方、潮田東部も生麦第一も住民みな参加して計画をつくりあげていると思います。特に生麦は住民皆が町への思いを記入している。またシールを貼ることで町の色々なことを考える機会をつくったという仕掛けになっています。

実際にこの事例に関わっている委員もいるかと思っておりますので、ご意見を伺いたい。

豊岡地区の事例では、当事者の参加についてどんな効果があったのか。

(委員)

当日の講座は司会進行をさせてもらった。

災害時のことを想定しつつも障害のある人とは、コミュニケーションが壁になる。そのような壁をどのような形で共通理解を深めていくかということだが、講座の中ではコミュニケーションボードを活用し、コミュニケーションの難しさを体験してもらい、どのように対応すれば橋がかかるか体験してもらった。

また就労支援事業所で就労している当事者の日常どのようなやりがいをもって地域で暮らしているのかが垣間見えるように意識してやった。印象に残ったのは、当事者の発表の中で地域住民にパン屋で働いている本人に気付いてもらった人がいた。そのことで本人は笑顔になった。日常の中での障害者の接点が大切。そのことが災害時の支援につながるのではないかと。他の地域にもお声かけてもらえたら、また実施できるのではないかと。

(進行役)

障害のある方との日常的な接点が重要。それがあれば、災害があった時もうまく関わられるのではないかと、というお話でした。

潮田東部地区では、潮田東部地区フォーラムで議論をされてきて元気づくりステーションにもつなげる話がありました。潮田地域ケアプラザが関わっていたかと思いますがやってみた感想はいかがでしょう。

(委員)

第2期では見守り事業で緊急カードをつくったりしていた。

第3期は鶴見区健康データがあまりよくないこともあり健康づくりを焦点にしようという今回の取組みが始まった。保健活動推進員が地区にいるがなかなか活動に結びついていない実情もあり、区、ケアプラザ、地域住民で打ち合わせた中で、横浜市の事業である元気づくりステーションに繋げていこうということになった。

実施までの流れとして、まず昨年度、健康福祉講座を開催し、講師の人に健康の大切さを伝え健康意識を高めたうえで、今年度より体操教室を実施。潮田東部は地区が広いので1か所だけでは参加できないという声もあり、月に4回毎週どこかの公園で実施している形をとった。40~50人とたくさんの方が参加してくれている。近所の人同士が誘い合って参加しているところでもつながりが生まれている。

運営面で区、ケアプラザの職員の支えもありながら、住民同士で話し合っただけで自主的にやっている。地区の人はやる気がある人がたくさんいる。参加している人の中から日頃の相談につながるケースもある。来年度、実際の元気づくりステーションにつながればと頑張っている。

(進行役)

全体のスキームを丁寧に行っている活動でした。

データを示して必要性を伝え、地区フォーラムという話し合いの場を設定して、区、

ケアプラザのサポートが入っている。そして場をつくって、住民がつながる活動をしなが
ら、最後は個別の相談業務までつながることもあり、第3期の目標である「必要な人
に支援が届く仕組みづくり」にもなっている。第3期の目標の3本柱が融合している事
例でした。

他に健康をテーマに色々な人がつながったというような似た事例があれば、保健活動
推進員として、いかがでしょうか。

(委員)

生麦第2地区ではウォーキングを年に1度実施している。またひざひざワックン体操
を月1回東寺尾会館でやっている。会場は狭いが30名来てくれて盛況。原西会館でも
月1回実施し、15名程度参加している。他にもノロウイルスなどのその時々学習会
をケアプラザの保健師にきてもらってやっていたり、認知症についての活動では生2ひ
まわり会で認知症の勉強会を進めてきた。

健やかに暮らせる地域づくりが3期計画にあり、健康をキーにしながら取り組みを進
めてきている。

(進行役)

他の保健活動推進員にもご意見を伺いたい。

(委員)

健康づくりではウォーキングは毎月している12月は築地までいった。地元の公園に
いったり、鶴見区内は毎月やっているのので2巡目、3巡目になっている。またフォーク
ダンスや親子体操を行い、区老人クラブ連合会では昨年からはグランドゴルフを独自ルー
ルで行い、ゆるやかに健康づくりを楽しくやっている

(進行役)

色々な人のつながりにもなって、あいねっと全体の取り組みにもつながっていると言
えるのではないかな。

(3) 話し合い～第3期計画の推進について～

(進行役)

次は意見交換「第3期の推進について」です。

第1回の推進委員会では具体的に解決する、アクションを起こす、解決するためには
横のつながりが重要だろうということを確認しました。今回は前回の継続として地域活
動をさらに活発にするために議論を深めていきたいと思えます。話し合いの参考になる
ような、横のつながりから具体的な解決につながった特徴的な2つの事例を事務局より
紹介してもらい、委員の方と具体的にアクションをおこすにはどうしたらよいか一緒に

考えていきたい。

【事例発表】

① 買い物調査から高齢者等の買い物支援（出張販売）につながった事例（寺尾地区）

・区社会福祉協議会職員より説明

東台自治会地区の活動。活動のきっかけは、寺尾福まち協議会の中で買い物アンケートを実施したところ717名のうち3人に1人が坂道の上の地区で買い物に困っていると回答。この結果をうけて地区会長からケアプラザへ相談が入り、ケアプラザ、地区会長、区社協で町の中で何かできないか去年の5月より検討してきた。

出張販売をするにあたり、地区センターで野菜の販売をしていた障害者作業所の協力得られた。また場所は地区の元民生委員の自宅スペースを開放してもらえることになった。人員としては町会の役員やボランティアを調整してもらった。

平成28年7月より野菜の販売月1回実施。50～60人が購入にくる。8月からはパンの販売も月1回実施している。福祉よこはまの広報誌にも掲載された。

② 町会の仕事を障害者グループホームが担うことになった事例（下末吉地区）

・鶴見区障害者支援担当職員より説明

精神障害者グループホーム「ハイムさざんか」があいねっとの地区フォーラムに参加して地域との関わりの中で変化が生まれた事例。

きっかけとして、グループホームの職員が入居者から何か地域でできることをしたいという声があることを地区の会長に相談。会長より下末吉あいねっとフォーラムの参加を提案され、平成28年1月に地区フォーラムにグループホーム職員が参加。「地域の担い手」がテーマとして話されていた中で、職員より地域活動に関心が高く、地域の中で何かをやってみたいという入居者の声や地域で共に生活していくことの大切さを伝えたところ、町会より、町会の組長の仕事を担ってはどうかという話があり始まった。

広報紙の配布等の活動の中で入居者より、「地域の方に活動を通じて顔を覚えてもらった。」「ありがとうと声をかけられそんなことを言われたことがなくて嬉しかった。」という声があった。作業所とグループホームの往復だけだった生活範囲が広がり、あなたがいて助かるという声が入居者の自信につながった。また地域住民にも障害を正しく理解してもらえるなど、意味があった。共生社会の取り組みの一つになった。

（進行役）

1つ目の事例は、日常的な支え合いで色々な団体が垣根をこえて横のつながりをつくって出張販売につながった事例でした。

2つ目の事例では、グループホームの入居者の声をきちんと受けとめて、町会の活動につながり、顔を知ってもらえるだけでなく、お礼をいってもらえることで自信と尊厳をもち地域で生きているという共生社会を実現しているような事例でした。

前回の推進委員会でも「隠さずに生きていく」という「共生」という話も出てきました。

ここからは話し合いに入っていきます。

もっと色々な団体とつながれば、新たな取り組みができるのではないかと。先ほどの事例でイメージがつくれているかと思います。あいねっとの目指すつながりある地域社会をつくるにはどうしていったらいいのか。活動を通じた体験談や、やろうと思っているけどうまくいかない障壁となっている課題、こんなふうにやったらいいというアドバイスがあれば伝えてほしい。いまの事例の感想でも、これからこんなことがあればいいのではないかと意見でもよい。皆さんにお話を伺いたい。

(委員)

配食活動ということで地域の高齢者とつながっている。お弁当を渡すことで高齢者が困っていることはないか、どんな顔をしているか細かなことをキャッチしてケアプラザにつなげて見守ることができている。単にお弁当を渡すだけでなく、日常生活の困りごとを聞くことがある。そうした中で、高度なことはできないが、例えばふすまを直すなど、ちょこっとボランティアもしている。灯油を運ぶのが大変というエレベーターのないマンションの住民の支援もしたことがある。20ℓの灯油を運ぶときは若い人に手伝ってもらった。

継続していることで高齢者も困っていることをちょっと言ってもいいかなと思ってくれている。

(進行役)

長く活動を継続していることで困ったことを言ってもらえ、次につなげていっている事例でした。灯油の事例では、若い人につなげることもされている。全て相談を受けた1人が対応のではなく、具体的にお願ひしたいことをできる人に伝えることで手伝ってもらえる人がでてくるかと思います。

次の方、いかがでしょうか。

(委員)

駒岡地区では、あいさつができなかった人たちがあいさつをするようになった。

きっかけは子ども。子どもを抱いているお母さんに声をかけていく。そうすることで子ども達が黙っていても挨拶ができるようになる。新しく引越してきた人にもあきらめずに声をかけていく。困ったこととしては、住民の中には民生委員が食事会に行こうと声かけしているが忘れてしまい、食事会に呼んでくれないという話す人もいる。そんなこともありながら活動を続けている。

(進行役)

あきらめない、継続していくこと。そのような入口として子どもがよいこと。いろいろヒントがでてきました。

子どもの話が出てきましたが、子育て支援としてまめっこひろばが、このような取組をした、こんなグループとつながったなどあればご意見を伺いたい。

(委員)

まめっこひろばでは子育て中のママたちのつながりをつくっている。現在、半数以上のスタッフが利用してくれたママたち。ここに職員として関わりたいと自ら言ってくれた人がいたり、そこまででなくても一般のママさんが口コミでどんどんまめっこ広場を広めてくれる。「双子の会」につながり双子がいっぱい来たり、障害児のママとつながりひろばに来たくれたりする。稼働率が120%になっている。

ちょっとした困りごとでも何につながるか分からないけれど、いつも誰かにこれが困っているけど何かないか、助けてと言っていることがいいのかもしれない。

職員はみんな自転車圏内に居住している。誰もがまめっこひろばのことを説明できる。

若い人はネット社会なのでつながり方が不特定多数の場面が多々ある。つながり方も多様性がある。

(進行役)

稼働率120%ということは他に場があれば、まだまだ色々な人が必要としているのかもしれない。

障害児の話がありましたが、つるみ地域活動ホームとして、いかがでしょうか。

(委員)

うちの法人には230人職員がいる。8割が鶴見区在住。

福祉は地域に根付くものと改めて感じる。地域のコンビニの店員とお友達になって交流しながら関わってもらうこともある。職員も地域住民であるというつながりの中で培ってきた見守りもあると思った。また買い物支援の事例の中で障害がある人がつながりの媒介として、作業所などで生産した野菜などがある。

グループホームの事例の意見として、入居者は障害者として生きているのではなくて地域住民として生きている。妨げているのは我々職員だったのではないか、ある意味障害者をお世話する、保護の対象としてみてはいないか、地域住民として主体性を持って生活しているのだ、と感じた。

障害のある方は、お金はないが体力と時間はある。鶴見区の人口も増えていく中で、障害の方の人数も増えている。軽い障害のある方も多い、主体性を発揮できるような取組みに地域の活動を見据えることが大切と感じた。

(進行役)

職員が区内に住んでいることが人のつながりをつくっていく、福祉のネットワーク、地域づくりのヒントとなるのではないのでしょうか。

また、媒介するものという話がありましたが、ただつながるといのは上手くいかないが具体的なモノと思いがあることが必要ということ。あわせて、キーワードとして困っている、助けてという声をとにかく出していくことが誰かが誰かを連れてきてつながってくる。最近「支援力」だけでなく「自援力」も支援者に必要ではないのでしょうか。

子どもの話がでていましたが、高齢者の中でこんなところとつながりたい活動についてなど、あれば老人クラブ連合会の立場としてご意見を伺いたい。

(委員)

2つの事例をみて、買い物難民は田舎の話とおもっていた。地元商店がなくなってしまふと困るのは足の不自由な高齢者。地元の商店を大切にしようと思改めて思った。

障害者の存在を認めてうまくいかしていく。障害者の方でもできることもたくさんある。昨年、地区の老人クラブ連合会のバス旅行に精神の障害をもつ若い人がきた。親より自分は旅行に行けないが、一人でどこも行かせられないから一緒に行かせてくれないかということだった。バスにのって隣で会話をしていた。地域に精神的な障害を持った人が何人かいる。特別な意識をもっていない。

事例をみて言われると何かしなきゃいけないなと思う内容であった。

(進行役)

今までの話を総括したような話をいただきました。

それでは次に、介護者の会で日々感じていること、こんなことができるのではということがあれば伺いたい。

(委員)

先ほどの駒岡地区の話で、一人暮らしのことがでていたが、日中独居の人は一人暮らしの食事会に入れない。もう少し緩和してもらえればよいと思う。

下末吉でケアサークル末吉というのがある。下末吉の駒岡地域ケアプラザエリアの介護事業所が集まって何か地域支援ができないか6～7年前に町会長の協力を得て進めている。6年前に徘徊者が死亡したことが活動のきっかけだったと思う。高齢者に登録番号がのったキーホルダーをつけ、徘徊等のいざという時に本人確認ができるようにする大田区の「みまーも」という活動をしている。介護予防講座なども実施している。

また区内に特別養護老人ホームが新規でできたがスタッフが集まらず入居を制限しているのでどうにかしてもらいたい。

介護者の会の世話人が11名いるがキャラバンメイトは7名いる。山、海、川3つのエリアでそれぞれ認知症サポーター養成講座をしている。私たちもキャラバンメイトと

して手助けできるような体制にしていきたい。

ダブル介護の問題もあり、介護の問題も多様化してきている。コツコツ続けていくことかと思う。

(進行役)

食事会のことや特別養護老人ホームのことなど具体的な課題がでてどうしたらよいかということも提起して頂きました。ダブル介護の問題では高齢者だけの問題でなく、子育ての支援や精神的な問題を抱えた家族もいるなど、一つの団体ではどうしようもないケースも多い。そのような人こそ支援が必要です。まさにあいねっとのネットワークの中で助けてという声をあげられるような新たな取り組みに繋がっていければよいと思いました。

次に、先ほど当事者主体という話もでてきましたが、精神障害のある方の状況はどうか、こんなつながりがあればいいということがあれば伺いたい。

(委員)

我々は家族の会なのですが、精神障害者なのでどうしても隠そうとするし、実際はそんなことはないのですが、差別をうけるという意識があるため会員が増えない。会員は高齢者である。

当事者という言葉を使ったが当事者はいっぱいいる。簡単に当事者という言葉でなくて、病気の人といってもらえたほうが良い。差別に関して先ほど言いましたが、実際に言葉や目つきにも出てくる。差別を言いだしたらきりが無い。感じる方の問題もある。

家族の会では家族が心の安定を感じることによって病気の人に少しでもよい方向になるようにしていくもの。我々がこのような連絡会に今まで出席させてもらったことはないのではないかと思う。ありがとうございます。

とにかく会員を増やそうということで、浜家連で精神保健福祉フォーラムを9月9日午後に実施する。推進会議をしていたが準備には高齢者も多く大変だった。医師の話やミュージックベルなども実施しようと思っている。フォーラムがあることを覚えておいてもらって、色々な人に声をかけてもらい多くの方に参加していただきたい。

(進行役)

まだまだ差別と感ずることがあるということでしたが私たちの大きなテーマにもなるかと思えます。また当事者という言葉もどうかという提案もありました。ここでは結論は決められませんが、考えていくことが大切です。

最後になりましたが、民生委員の立場としてお話を伺いたい。

(委員)

民生委員の立場で出席をしているが、少子高齢化が急速に進む中で、障害者の話も含

めて大変参考になった。

ただ、まちづくりの中で一番重要なのは、民生委員ひとりで何もできない時代となっており、隣近所の少数の単位で困りごとを見守る体制づくりが大切と思う。

障害者の話が多くでしたが、市場地区で取組んでいるのは障害者と健常者のカラオケ大会を地域ケアプラザで年3回、延べ25回やっている。みなさんに参加者を募集すると30団体の障害者が応募してくる。みなさん喜んでいる。私は審査委員で出ているが障害者の方は一生懸命練習し、元気。健常者と一緒にやるというのが特徴だが、友人、職員、両親を連れてくるので会場もいっぱいになる。長く続けていきたい活動。活性化のひとつになるのではないかと思っている

(進行役)

いろいろなことをまとめてくれたお話でした。

ここでみなさんのお話をまとめていきたいと思います。

まず「どのように取り組むか」ということについて

① すぐに期待せずにあきらめないこと

② 助けてといえる声をだす

そのことが本人や支援する人、すべての人にあてはまるのではないのでしょうか。

そして「人をつなぐ」ということについて

① 場の提供をすること

カラオケもそうですし、思いを持った人が場を設定するためにいろいろな仕掛けをしていることが見えてきた。

② 人をつなぎやすい媒体がある

例えば、生産物などのモノや子ども等人をつなぎやすい媒体のヒントがでてきた。

ダブル介護などに象徴されるようにたくさんの問題が重なっているものがある。ただそれは、これから色々な人がつながっていくチャンスなのではないのでしょうか。

そのようなものを具体的に整理しながら、ここにいる人たちが自分たちだけではできないのだけど、という声をだしていくことが具体的なアクションをつくっていくヒントになるのではないか。自分たちでは上手くいかないという声をだせるネットワークがこのあいねっとの中でできるといいのではないか。

そのようなことで、まとめてにさせてもらいたい。

(3) つるみ・地域元気づくり事業について

- ・地域力推進担当係長より説明
- ・平成29年度の補助金を1月20日から2月28日まで募集。

- ・ 毎年あいねっとの関係団体からも数多くの応募をいただいている。
- ・ 詳細は資料を参照していただき、説明は省きます。

(進行役)

質問があれば伺いたい。

⇒特になし

それぞれの団体のお知らせがあれば伺いたい。

⇒特になし

4 閉会